

2013年
第19回 函館港イルミネーション映画祭
第17回シナリオ大賞受賞作品

函館市長賞
〔グランプリ〕

いとう菜のは
函館珈琲



【作者プロフィール】

いとう なおのは

脚本・演出家麻創けい子氏に師事。元シナリオセンター通信作家集団。

受賞歴 2007年・大阪シナリオ学校脚本賞佳作、
09年・富士山河口湖映画祭 実行委員長賞、09年・囲碁
マンガ原作コンクール佳作、10年・伊参スタジオ映画
祭審査員奨励賞、11年・佐賀県唐津市観光PR用シナ
リオ、11年・伊参スタジオ映画祭上毛新聞社賞、11年・
南のシナリオ大賞 大賞。

12年〜ニッポン放送『AKBラジオドラマ劇場』執筆。
名古屋市在住。

【あらすじ】

函館の街の中に佇む古い西洋風アパート
翡翠館。オーナーの荻原時子は翡翠館を仕
事場兼居住スペースとして開放し、若い才
能を後押ししている。

101号にはガラスを加工したとんぼ玉
の職人一子、102号にはテイベア作家
の相澤、104号にはピンホールカメラの
写真家佐和、と個性的な面々が入居する。

空室の103号に入居予定だった家具職
人敷下は、恋人の妊娠を機に函館への移住
を断念する。翡翠館に未練を残す敷下は、
ルームメイトで大学の後輩の松山に、自分
の代わりに函館へ行かないかと提案する。

気が進まないながらも敷下が出たあとの
家賃を一人で払うことが厳しい松山は、函

館の翡翠館を訪れることに。103号を古
本屋として利用する、という条件で時子の
面接を受け、一ヶ月の滞在猶予をもらった
松山。翡翠館の住人たちとの交流を深めて
いく。

我が子と二度と会えない一子、故郷を遠
く離れた相澤、対人恐怖症の佐和。心に小
さな棘が刺さったままの住人たち。松山の
淹れるコーヒーは、そんな彼らの心の傷を
ちよつぴり癒す。

一方、その交流の中で、松山は徐々に自
信を失っていく。古本屋という名目でここ
へ来たものの、実際は古本をネットで転売
して利益を得るだけの『せどり』と呼ばれ
る商売。

夢と誇りを持って作品を作る住人に対し

て、何も生み出さない自分があまりにも惨めなふがいに、松山は翡翠館を出る決心をする。

決意を告げにきた時子の家で、松山は思いがけないものを目にする。それはかつて自身が書いた小説『不完全な月』。それ以来小説を書けなくなっていた松山だが、ここでならもう一度作品に向き合えると信じて、敷下が時子に送っていたのだった。

函館に早い秋が訪れる頃、コーヒーも飲める古本屋『函館珈琲』がオープンを迎えようとしていた。

【人物】

松山英二 (31) 古本販売業

堀池一子 (39) ガラス細工職人

相澤幸太郎 (24) テディベアアーティスト

〃 (8)

藤村佐和 (30) 写真家・時子の姪

萩原時子 (67) 翡翠館オーナー

敷下恭介 (33) 松山の大学時代の先輩

まみ (6) くまの修理に来た少女

○飛行機の機内

飛行中の飛行機の機内。

窓際の席に座る松山英二(31)。

窓の外は雲に覆われ、景色は見えない。

広がる雲だけの空を、ぼんやりと眺めている松山。

松山の声「先輩……冗談つすよね、それ」

○松山のアパート

2DKのアパート。

一室ずつをシェアする松山と藪下恭介(33)。

松山のスペースは、床が見えないくらいの本の山。

壁面の書棚はもちろん、床にも平積

みされた本があふれている。

ダンボールに本を整理している松山。

藪下、小刀で小さな木片を削りながら、

藪下「冗談なんかじゃないよ。……冗談だったら、俺も笑えるけど」

松山「だってあんなに楽しみにしてたじゃないですか、函館。ほら、これ売り物に

せずによけてあつたんですよ、先輩用に」
松山、函館にゆかりのある本を、本

の山の中から取り出す。

函館の歴史書、旅本、辻仁成の小説など。

藪下「ごめん、英二」

松山「いや、俺は別に……。つか、ってことはもしかして引越しもなし？」

松山、本を整理する手を止める。

藪下「いや、この部屋は……出て行くよ」

松山「……ですよね」

再び作業を続ける松山。

松山「風向き、変わったんですか」

藪下「180度」

松山「……金？」

藪下「いや、そうじゃないんだ」

松山「じゃあどうして。自分の店持てるチ

ャンスなんですよね、学生の頃からの夢

だった。先輩の夢のためならって俺……」

藪下「夢、もうひとつあったんだ」

松山「もうひとつ？」

藪下「ひとつは、家具職人として自分のス

ペースを持つこと。もうひとつは……」

松山「……」

藪下「親父になること」

松山「親父って」

藪下「絢美が、妊娠したんだ」

松山「えっ」

藪下「つまり、そういうこと。ありがちな

流れでウケるだろ」

松山「全然笑えないっす。じゃ、絢美さん

と一緒に函館行けば」

藪下「それも考えたけど……。いずれは彼

女の家を継ぐことになるんだ、近い将来。

どっちも中途半端になるくらいなら、今

決断するべきだと思つて。まだ何も始ま

ってないし」

松山「絢美さんの家って、新聞の販売店で

したっけ」

藪下「通勤ラッシュが嫌でサラリーマン辞

めた俺が、誰よりも早く起きて仕事すんだ」

松山「先輩……。いいんですか、あきらめて。

今ならまだ」

藪下「(遮って) 英二。俺、悲観してるわけじゃないんだよ。だってもうひとつの夢が叶うんだしさ」

松山「……」

藪下「ほんとだって。今、これくらいなんだって」

藪下、彫っていた小さな木片を見せる。

8センチほどの胎児の形をしている。

松山「(無然と) おめでとうございます」

藪下「なんだよ、その言い方」

松山「先輩だって、全然嬉しそうじゃない」

藪下「そのうちじわじわと喜びが湧いてくるんだよ」

松山「先輩が決めたことならもう何も言

ません。まあ俺も楽しみにしてたけど。

遊びに行ったらイカ食って塩ラーメン食って、五稜郭行って函館山から夜景見て……」

藪下「行かないか?」 函館」

松山「はい?」

藪下「英二、俺の代わりに行かないか?」

松山「何言っちゃってんすか」

藪下「本気で考えてみないか?」 すごいチ

ャンスだと思うんだ」

松山「チャンスって……。面接で選ばれた

のは先輩ですよ。先輩が行かないんなら

誰か他の人が」

藪下「嫌なんだよ！ 他の奴にあの場所渡

すなんて」

松山「……」

藪下「あそこでなら自分らしく生きていけるって思ったんだ。……時間の流れ方が

こことは違うっていうか」

松山「時間の流れはどこでも同じ、24時間

です。そりゃぶつちやけ俺一人でこの

家賃払えないし、どっちにしろ出て行き

ますよ。でも現実問題として、今回の話

は先輩の作る家具あつてこそその話でしょ。

俺が行けるわけないっすよ」

藪下「家具に限らないんだ。まちづくりを

担う人材、つてくりだから。もう一度

面接してもらおうんだよ！ 俺からもオー

ナーさんに話してみるから」

松山「尚更お呼びじゃないですって。まち

づくりって何ですか。俺が何にも生み出

さない人間だつて先輩が一番よく知つて

るくせに」

藪下「違うだろ、英二」

松山「違うって何が……」

藪下「何も生み出さない人間じゃないだろ、

お前は」

松山「……いつの話してるんです？ 俺は

ただの……」

藪下「いいのか？ このままで」

松山「……」

藪下「東京でこの半分の家賃のアパート

見つけたって、今と何も変わらないだろ。

いや、今よりむしろ……」

松山「俺は満足してるんです。この生活に」

松山、意地になったように本を束ねてはダンボールに詰め込む。

藪下「お前に、行って欲しいんだよ」

松山「だから無理ですって。諦め悪いっすね」

○同・路上

住宅街の路上。

ポストンバッグを担ぎ、iPhoneの地図アプリを見ながら歩く松山。

松山「この辺か……」

○飛行機の機内

飛行中の飛行機の機内。

ぼんやりと窓の外を眺める松山。

真っ白だった雲が徐々に晴れ、眼下

に函館の町が見えてくる。

○翡翠館

ペーパーミントグリーンの涼しげな外壁。

古民家を改装した和洋折衷のアパート。

門には『翡翠館』の木の看板。

松山、建物を見上げる。

○函館市内

レトロな路面電車が走る。

遠くに見える函館山。

松山「ここが、翡翠館」

アパートの玄関が開き、白髪の上品

な老婦人萩原時子（67）が出てくる。

時子「あなた、藪下さんの……」

松山「はいっ、初めまして。松山英二です」

時子「とりあえず、こちらへどうぞ」

松山「お邪魔します……」

招かれるままに後に続く松山。

○同・廊下

玄関ホールへ入ると、101号から

104号までの各部屋の玄関がある。

中廊下を通過しながら説明する時子。

時子「古い建物だから歩くとギシギシいう

けど気にしないでね」

松山「はい……」

時子「この101号は一子さんのガラス工

房」

101号の玄関、『薄荷堂』のプレー

ト。

松山「……」

102号の前を通過すると、カタカ

タとミシンの踏む音が聞こえてくる。

時子「こちらは相澤さん。テディベアの作

家さん。まだ若いのよ」

松山「テディベア……」

102号の玄関にはくまの形のプレ

ート。

『BEAR FACTORY』とある。

時子「103の向こう、104号はちよつ

と変わった写真家が使ってるの。今は撮

影で留守だと思っけど」

103号を通り過ぎ、104号の玄

関を指し示す時子。

玄関には何のプレートもない。

桧山「……」

時子「で、今回募集をかけたのがこの

103号」

時子、103号に戻り玄関の鍵を開ける。

時子「どうぞ」

桧山「はい、失礼します……」

○同・103号・中

あめ色にツヤの出た床、梁、柱。

吹抜けになった高い天井。

12畳ほどのスペースの奥には小さな

キッチンカウンター。

カウンターの更に奥には、2階へと

続く階段がある。

桧山、部屋を見回し、

桧山「すごい……。内装も建築当時のまま

ですか」

時子「一階部分はね。昔は学生さん向けの

貸しアパートだったの。学生が減って一

度閉めてからは20年以上使ってなかった

んだけど」

桧山「そんなに」

時子「また若い人に使ってもらおうと思っ

て。五年前に一階と二階をひとつの部屋

に改装したの。メゾネットタイプってい

うの？」

桧山「(見上げて)……」

時子「だから二階は居住スペース。一階は

好きにしてもらってるわ」

桧山「あの、俺……本当に来てしまって良

かったんでしょか」

時子「藪下さんの家具工房、とても素敵だ

と思ったのよ」

松山「……はい」

時子「地元の木材で一生使える注文家具を作る……。翡翠館を立ち上げたことの趣

旨を一番ふまえてくださってた。彼もこ

こを気に入ってたようだし」

松山「ええ、とても」

時子「その藪下さんのご紹介だもの、むげにお断りできないわ。住むところもない

つておっしゃるし」

松山「……お恥ずかしい限りです」

時子「人生は恥ずかしいものなのよ。気に

しちゃダメ」

松山「……はい」

時子「ただし、ここに入居できるのは審査

に合格した方だけなの」

松山「わかってます」

時子「松山さん、でしたわね。藪下さんの

お話では、あなたはここで……」

松山「はい。古本屋を」

時子「古本屋さん……」

松山「……はい」

時子「そういうのは初めてだけど……。まあ、

面白いかもしれないわね」

松山「(ホッとして)」

時子「荷物はいつ届くの？」

松山「明日、トラックで」

時子「では、一ヶ月」

松山「……」

時子「一ヶ月はお試し期間です、お互いの。

プランを提出していただいて、正式にご

入居いただくことになったら三ヶ月の準備期間のあと、開店させてください」

○同・101号玄関前

時子「もちろん松山さんの方でお気に召さなければ、それもご縁がなかったということですから」

松山「……わかりました」

時子、『薄荷堂』のプレートが掲げられた101号の玄関をたたく。

時子「他のご入居者の方とも交流されるといいわ。翡翠館のこともわかるし、長くおつきあいすることになるかもしれないし」

一子の声「開いてまーす」

時子「……はい」

時子「失礼するわね」

時子「他のご入居者の方とも交流されるといいわ。翡翠館のこともわかるし、長くおつきあいすることになるかもしれないし」

時子が玄関を開けたとたん、こもっていた熱気が外に洩れる。

時子「他のご入居者の方とも交流されるといいわ。翡翠館のこともわかるし、長くおつきあいすることになるかもしれないし」

思わず身をのけぞらせる松山。

時子「他のご入居者の方とも交流されるといいわ。翡翠館のこともわかるし、長くおつきあいすることになるかもしれないし」

松山「熱っ……」

時子「他のご入居者の方とも交流されるといいわ。翡翠館のこともわかるし、長くおつきあいすることになるかもしれないし」

松山「熱っ……」

時子「他のご入居者の方とも交流されるといいわ。翡翠館のこともわかるし、長くおつきあいすることになるかもしれないし」

松山「熱っ……」

時子「他のご入居者の方とも交流されるといいわ。翡翠館のこともわかるし、長くおつきあいすることになるかもしれないし」

○101号・中

時子「ご案内するわ」

103号と同じ間取りの半分はコンクリート敷きのガラス工房。

時子「ご案内するわ」

あとの半分のスペースには、ところ狭しと並べられた色とりどりのとんぼ玉。

時子、立ち上がり103号を出る。

後続く松山。

とんぼ玉。

材料の色ガラス、道具類などが棚にきれいに収められている。

長い髪を頭上で無造作に束ね、化粧つけない堀池一子（39）が、保護用の大きなメガネをかけて作業している。

高温のバーナーでガラスを熔かしている一子、作業の手は止めずに

一子「時子さん？」

時子「ごめんなさいね、お仕事中に。面接の方ご案内したの。東京からいらした

……」

桧山「桧山です。よろしくお願いします」

一子、桧山の顔も見ず、

一子「こちらこそよろしく。時子さん、適

当にご案内して」

時子、苦笑いで部屋の中を案内する。

時子「一子さんはね、とんぼ玉の職人さんなの」

桧山「とんぼ玉？」

時子、一子の作品のひとつを手に取り、

時子「こういうの。加工してアクセサリやなんかになるの」

透明の小さなガラス玉の中に、閉じ込められた青。

桧山「これ、ひとつひとつ手で作るんだ

……」

桧山、作業する一子を見る。

背中を丸めてとんぼ玉を作る一子。

バーナーの青い炎にあぶられ、トロリと熔けたガラス。

心棒をくるくると回しながら、コテで形を整えていく。

みるみる美しく造形されていくとんぼ玉。

熱で黒く見えていたガラスを火からおろすと、見事な色合いが浮かび上がる。

メガネを取って出来ばえを確かめる

一子。

一子「よし」

傍らに置いてある灰入りの甕の中に、心棒ごとガラスを埋め込む。

一子、その様子にじっと見入っていた
た松山の視線に気づく。

一子「……面白い？」

松山「あ、はい。あの、どうして灰の中に

入れるんですか」

一子「これは徐冷灰って言って、熱のこもったガラスをゆっくり冷ますために使うの。一気に冷やすと割れちゃうのよ」

松山「なるほど……」

一子「(時子に)で、こちらは？」

時子「だから、東京からいらした……」

松山「松山です」

一子、カラカラと豪快に笑い、

一子「ああごめん。全然聞いてなかった」

時子「一子さん。彼に翡翠館のこと、いろいろ教えて差し上げてほしいの」

一子「そういうことなら、ついでにちよつと手伝ってもらおうかな」

○函館の町

路面電車で並んで町の中を走る軽ワゴン車。

運転席には松山の姿。

○同・車内

ナビを見ながら運転する松山。

松山「無茶振りするなあ、あの人」

後部の荷台では仕切りのついた木のトレイに収められたとんぼ玉がカタカタと揺れている。

○赤レンガ倉庫・前

松山の軽ワゴン車は赤レンガ倉庫前へと入ってくる。

○同・中

個性豊かなショップが並ぶ店内。

キヨロキヨロと辺りを見回しながら木のトレイを運ぶ松山。

○ギャラリーカフェ・前

古い和風建築のカフェ。

トレイを持った松山が入っていく。

○元町あたり

ゴシック様式の教会の前を通り過ぎる松山の軽ワゴン車。

○函館港沿いの道

停泊する船舶。

松山の軽ワゴン車が駆け抜けていく。

○薄荷堂・中

汗だくの松山、椅子に座ってくつろいでいる。

隣の部屋から小さく聞こえているミンシンの音。

手作りのグラスに入ったサイダーを運んできた一子。

一子「おつかれさま。助かったわー。今日に限って納品と大量注文が重なってて」

松山「いただきます」

ゴクゴクとサイダーを飲み干す松山。

一子「でも、函館見物できたでしょ」

松山「ええ。お洒落で異国情緒があつて……」

一子「それはガイドブックに載ってる函館」

松山「え……」

一子「もっと素敵な函館、いっぱい見つけ

てよ」

松山「でも俺、どうせずっとはいられないと思います。とりあえず次の行き先決まるまではいたいけど」

一子「時子さんに聞いた。あの人厳しいよー」

松山「……はい」

一子「あの家具の人のこと、とっても気に入ってたから」

松山「そうみたいですな」

一子「家具の人が来たらその陳列棚、安く作ってもらおうって思ってたのに」

松山「……すみません」

一子「本屋さん、だっけ。どんな本扱うの」

松山「どんな本、って……。なんでもです。

売れる本なら、なんでも」

一子「それって時子さんの審査通るかな。

もつとむしろ……売れない本専門とかに
した方が」

松山「そんなの、食べていけないじゃない
ですか」

一子「(笑って) まあ、そうだね」

一子、何かを思い出すように

一子「私も……四年前にここ借りられなか
ったら、とてもやっていけなかった」

松山「一、二階併せて家賃五万、って。最初
は冗談かと思いました」

一子「お金じゃないんだよ。自分の本当に
大切なものを集めたいんだと思う。『翡翠
館』って名前もね、ひとつひとつの部屋
が時子さんにとっての輝く宝石なんだっ
て」

松山「輝く宝石……」

一子「荷物、明日届くんですよ」

松山「はい」

一子「じゃ、今日のところはのんびりして
……コーヒーでも淹れるわ」

一子、立ち上がりカウンターへ。

空のインスタントコーヒーの瓶を振
り、

一子「あーあ。ごめん、切らしてる……」

松山「コーヒーなら俺に任せてください」

松山、ポストンバッグから使い込ま
れた真鍮製のパーコレータを取り出
す。

一子「うそ、そんなの持ち歩いてるの」

松山「俺の必需品です」

松山、更にあらびきのコーヒー豆を
取り出す。

松山「キッチン、借ります」

× × ×

コンロにかけられたパーコレータ。

ガラスの蓋に上がってくる蒸気が、透明からコーヒーブラウンに変わる。

覗き込んでいる一子。

火を止め、蒸らす間に手際よくカップを用意する松山。

一子「いい香り」

コポコポ……とカップに注がれる琥珀色の液体。

隣の部屋から聞こえていたミシンの音が止む。

続いてドンドン、とドアをノックする音。

一子「開いてまーす」

ガチャツと玄関が開き、デニムのエプロンをした相澤幸太郎（24）が入ってくる。

相澤「なんか、すっごくいいにおいがするんですけど！」

× × ×

工房の片隅のテーブルでコーヒーを飲む一子、松山、相澤。

相澤「あー、まったくする……」

相澤の傍らには、同じデニム生地のエプロンをつけたくまのぬいぐるみ。

相澤の腕に時計のように巻かれたピンクッション。カラフルな待ち針が刺さっている。

松山「じゃ、君が102号の」

相澤「相澤幸太郎です。くま、作ってます」

桧山「男の子だったんだ」

一子「くまフェチの24歳」

相澤「フェチってやめてくださいよ」

桧山「ここにはいつから?」

相澤「去年の春です。就職浪人中に趣味で

作ってたのを、時子さんが気に入ってくれて。ここに入れなかったら、いまだに引きこもりの万年就職浪人ですよ」

桧山「……」

相澤「そうかー、家具の人来ないのかぁ。

くま用のミニチュア家具、作ってもらお

うと思ってたのになぁ」

桧山「なんか……ごめんね」

相澤「ああいえ、桧山さんが謝ることじゃ

……。決まると思いますね、入居」

桧山「ありがとう」

相澤「一子さんがめずらしく大人しい」

静かにコーヒーを飲んでいた一子。

一子「いや、コーヒーってこんなにおいし

かったかな、って思ってた」

相澤「確かに」

桧山「人生に欠かせないもの挙げろって言

われたら、コーヒーと……インターネッ

トかな、とりあえず」

相澤「人生に欠かせないもの……。僕は、

くまとチーズタルトですね。一子さん

は?」

一子「私は……空の青と海の青、かな」

相澤「わー、ずるい。自分だけかっこいい

こと言っちゃってるー」

一子、壁に飾られた函館の風景写真

を見る。外国人墓地から見る海と空。

境界線が曖昧なぼんやりとした青。

一子「あの青を出すのが夢なの。だからこの街に来た……」

松山「……」

相澤「……」

のんびりとコーヒーを飲む三人。

○103号・二階（夜）

薄暗い室内。

居住のためのスペース。

翡翠館のフロアの半分は吹抜けで、

その半分がロフト状の居住スペースである。

102号から小さく聞こえてくるミ

シンの音。

何も無いフロアにシユラフを広げ、

スマホでメールを打っている松山。

暗がりの中、スマホの液晶が松山の表情を照らす。

松山M「先輩……。みんなが待っていたのは『家具の人』のようです。やっぱり今からでも考え直すわけには……」

松山、小さくため息をつき、打ちかけたメールを消していく。

104号のドアが開く気配がし、闇の中にピアノの音色が忍び込む。

それはドビュッシーの『月の光』。

松山「……」

まどろむように眠りに落ちる松山。

○翡翠館・全景（朝）

引越しの2tトラックが停まってい

る。

次々に荷を降ろす作業員。

○同・103号・中

荷物の置き場の指示を出す松山。

松山「四角い印のあるものはこっちの隅に、

あ、それは丸だからこの辺りで」

業者が運び込むダンボールで、一階の床が見えなくなっていく。

二階へ続く階段から、オレンジのチエツクのシャツを着た相澤が声をかける。

相澤「松山さん、上の荷物、コレだけです

か？」

○同・103号・二階

床の上にはシユラフと小さなポスト

ンバッグ、モバイルのパソコンだけがポツン、と置かれている。

相澤の傍らには、同じオレンジのチエツクのシャツを着たくま。

相澤「松山さん、北海道の冬、なめてます？」

松山「いや、でも……冬までいられるかわ

かんないし」

相澤「ネガティブだなあ、もう」

松山「だって俺、『家具の人』じゃないから」

相澤「うわ、根に持つてる。じゃ、今日は僕が函館の街をご案内しますよ！」

○八幡坂

八幡坂を自転車で駆け下りる相澤と

松山。

両サイドの街路樹は青々と繁る。

函館港に向かって滑走していく二台の自転車。

○ペリー提督像・前

疾走していく二台の自転車。

○ロープウェイ・全景

函館山に登っていくロープウェイ。

○同・中

ゴンドラの中から眼下を見下ろす
山と相澤。

松山「おー、すげー。大パノラマ」

○同・山頂

山頂から見える函館の街。

相澤「左が函館港、右が津軽海峡、JRの
駅の向こうに見えるのが五稜郭です」

松山「ほんとか。タワーが見える」

相澤「僕が生まれた町も港町でした。もつ
とずーっとの南の方ですけど」

松山「南？」

相澤「もう、戻れないんです。こんなに遠
くに來ることになるなんて」

松山「……」

相澤のウエストバッグからのぞくく
ま。

松山「そういえば、104号つてどんな人？」
相澤「ああ、佐和さん。僕も数回挨拶した

程度です。撮影で外に出ることが多い
みたいで」

松山「写真家さん、って聞いたけど」

相澤「一子さんの部屋にあった海の写真。

あれを撮った人ですよ」

松山「へえ……」

○翡翠館・前（夜）

自転車に乗った相澤と松山が帰ってくる。

松山「ラーメンうまかった！」

相澤「今度B級グルメ巡りしましょう。一

子さんの自転車、いつでも使っていていっ

て」

松山「ありがとう」

相澤「じゃ、また明日……」

ダンボールを開け、本の整理をしている松山。

102号からはミシンの音が、10

4号からは『月の光』が聞こえている。

パソコンのリストを見ながら、送付

先のラベルを作る松山。

注文の本をプチプチの緩衝材で包み、

封筒に入れてはラベルを貼っていく。

104号から聞こえていた『月の光』

が止む。

104号の玄関の開く音。

松山「……？」

松山、103号を出て廊下の外をの

ぞく。

玄関ホールに消えていく藤村佐和

○103号・中（夜）

(30) の後ろ姿。

松山「……」

○函館市内（夜）

夜の街なかをカメラバッグを手に歩いている佐和。

ある一軒のラーメン店に入る。

隅のテーブル席に座った佐和に、店

員が水を運んでくる。

佐和、店員とは目を合わせず、

佐和「……塩ラーメンひとつ」

○繁華街（夜）

ネオンが光る夜の繁華街。

酔っぱらいのサラリーマンが通り過

ぎる。

佐和、三脚に四角いカメラらしきも

のを取り付け、構図を決める。

カメラに張ってあったテープをはがすと、小さな針の穴が現れる。

それは、ブリキの箱でできたピンホールカメラ。

カメラの前を、サラリーマンやOLが大声で話しながら行く。

ストップウォッチを片手に撮影時間を計っている佐和。

○103号・中（夜）

ダンボールはおおかた片付き、本は文庫とハードカバー、作家やジャン

ル別に分類して積まれている。

部屋の隅に、ひとつだけガムテープを貼ったままのダンボールがある。

キッチンでコーヒー豆を挽いている

松山。

手回しのミルで荒めに挽いた豆を、ネルドリップのフィルターに入れる。ドリップケトルでゆっくりと蒸らしのための少量のお湯を注ぐ。104号の玄関が開く気配。

松山「……」

○104号・中（夜）

暗幕で覆った暗室の中。

赤いセーフティライトが点灯している。

佐和、ブリキのカメラから印画紙を取り出し、ピンセットでつまんで現像液の中に沈める。

佐和「……」

印画紙にゆっくりと像が浮かびあがってくる。

すかさず停止液に浸し、ゆらゆらと揺らしたあと、すぐに定着液に移す。出来上がった写真を壁に張られた口ーブにクリップで留め、乾かしていく。

サラリーマンなど人物の姿は無く、ピントのボケたようなネオンの灯りがぼんやり浮かんでいる。

○103号・中（夜）

コーヒーを淹れている松山。

蒸らしが終わったネルフィルターから、ガラスのサーバーに落ちてゆく

しづく。

一杯分のコーヒーが落ちる。

温めておいたカップに、淡い湯気と

ともに注がれるコーヒー。

○104号（夜）

暗幕を開けて暗室から出てくる佐和。

最低限の家具だけのシンプルな部屋。

壁にはこれまで撮った写真が額に入れて飾ってある。

壁面の棚には、さまざまなピンホールカメラ。

本格的なチタン製のものから、クツ

キーや紅茶の空き缶、紙製のものまで。

で。

すべて小さな針の穴が開いている。

サイドテーブルの上に置かれた年代もののレコードプレーヤー。

佐和、プレーヤーの上のLPレコードにゆつくりと針を落とす。

静かに流れる『月の光』。

佐和、サイドテーブルの引き出しを開け、ノートを取り出す。

表紙には『今日しゃべったことば』。

佐和「……」

パラパラとページをめくり、真っ白なページに記入する。

『6月9日 塩ラーメンひとつ』

○翡翠館（朝）

快晴の朝。

ペパーミントグリーンの外壁が朝陽

に映える。

○同・102号・前(朝)

相澤が立て看板を出して開店準備をしている。

通りかかった桧山。

相澤「ああ桧山さん。おはようございます」

桧山「おはようございます。……これは？」

相澤「週末はショップをオープンしてるん

です。一子さんも一緒に」

桧山「ショップ？」

相澤「暇だったら手伝ってくださいよ」

○102号・中

玄関を開け放ち、ショップとしてオープンしているテディベアショップ。

客はまだいない。

桧山、部屋の中を見回し、

桧山「これは……すごいな」

ひな壇のように設置された棚には、上から下まで大小のくまたち。

毛足の長いぬいぐるみタイプ、コー

デュロイ、サテン、花柄、ストライ

プ……。

生地も素材も大きさもさまざま。

壁面には大きさの違ういくつもの型

紙がぶら下がっている。

棚にはプラスチックの透明なケー

スに、目のパーツや部品が整理して

収められている。

相澤、足踏みミシンをカタカタと踏

みながら、

相澤「テディベアの名前の由来は第26代アメリカ大統領、セオドア・ルーズベルトの時代まで遡るんです」

相澤「置いてあったテディベアの洋書を手に取り、開く。

英文に写真や挿絵が入っている。

相澤「ある日熊狩りに出かけた彼は、側近があらかじめ用意した瀕死の仔熊を撃たずに助けた。弱った熊を撃つなんてスポーツマンシップに反する、と言って」

相澤「興味なさそうに相澤の話の聞いています。

相澤「その頃アメリカ向けに大量のテディベアを作っていたのがドイツのシュタイフ社。何しろ当時のドイツのおもちゃ生産高はイギリスの6倍だったんですよ！」

相澤「へえ……」

相澤「もちろんその頃イギリスでも独自のベアが作られてて、ハーウィンアンドカンパニー社では、世相を反映した軍服姿のベアなんかも売り出していて」

その時、若い女性の二人組が中をのぞく。

女性「あの一。もう開店してますか」

相澤「ホッとして

相澤「どうぞどうぞ、いらっしやいませー」

相澤「いらっしやいませ」

女性二人組、楽しそうにくまたちを見て回る。

そこへ、おさげの少女まみ（6）が一体のくまのぬいぐるみを持ってやってくる。

まみ「こんちには」

相澤、ミシンを踏む足を止め、

相澤「こんにちは。くまさん、どうかしたの」

まみ「ポコちゃんがね……」

まみ、ぬいぐるみの両手を動かして

みせる。

万歳の状態で止まる右手に対して、

左手はだらーん、と落ちてしまう。

相澤「これはね、ジョイントっていう手足

を動かすためのパーツが中で壊れちゃっ

てるんだ。新しいのに交換すれば元通り

になるよ」

まみ「本当？」

相澤、部屋の一面に置かれた救急車

の形のダンボールにポコちゃんを入

れる。

中にはすでに眼帯をしたくまや絆創

30

膏を貼られたくまが入っている。

相澤「少し入院してもらってから、来週迎え

にきてあげて」

まみ「ママがね、壊れちゃうから、あんま

りポコちゃんと遊んじゃダメっていうの」

相澤、しゃがんで少女と目線を合わ

せ、

相澤「テディベアはね、小さい子が抱っこ

したり一緒に寝たりするために作られた

んだ。だからポコちゃんも、飾っておか

れるよりも一緒に遊んで欲しいんだよ」

まみ「うん、わかった！」

嬉しそうに飛び出していくまみ。

相澤が肩から斜めにかけてかけたポーチに

は、相澤と同じ服を着たくまが顔を

のぞかせている。

× × ×

込み合ってきたティディベアショップ。

会計やプレゼント用のラッピングに

追われる相澤と松山。

× × ×

一段落し、コーヒーを飲む二人。

相澤「……ふう。松山さんがいてくれて助

かりました」

松山「いや、なんかもう、わかんないこと

ばかりで。全然役に立てなくて……」

松山、相澤の肩掛けポーチの中のく

まを見つめ、

松山「ほんっとにくまが好きなんだな」

相澤「僕は、くまに救われたんです」

相澤、ポーチの中のくまを取り出し、

相澤「タローっていうんです。この子は、

天から降ってきたんです」

松山「え……？」

相澤「ハハ……ウソです。本当は、走って

るトラックの荷台から落ちてきたんです」

○（回想）バス通り

ランドセルを背負い、泣きながら歩

いている小学生の相澤幸太郎（8）。

後ろから追い越していくトラックの

荷台から、一体のくまのぬいぐるみ

が落ちてくる。

思わずキヤッチする幸太郎。

○元の102号

相澤、くまを見つめ、

相澤「この口元がへの字の、笑ってるのか怒ってるのかわからない顔見てたら、いつの間にか涙が止まってました」

相澤「それがきつかけ……」

相澤「ひな壇に並んだくまたちを見る。る。」

相澤「くまは何もしない。何もしてくれない。ただのほほん、とそこにいるだけです。」

でもくまは僕に『頑張らないこと』を教えてくれた」

相澤「頑張らないこと」

相澤「世の中にはくまが必要です。だから僕はくまを作る。たくさん作る」

相澤「……」

相澤「相澤さん、くまは世界を救うんです！」

相澤「世界……」

いつのまにか入り口に立っていた一子、呆れ顔で、

一子「相澤くん。相澤ちゃんのくま談義につき合ってる暇あったら、こっち手伝ってくれない？」

○101号・中

とんぼ玉の手作り体験でにぎわう室内。

小学生の児童数人が軍手をはめてバーナーでガラスを溶かしている。

子ども相手に容赦なく指導する一子。

一子「ほら、ススが入る！ もつと炎の上の方にガラス移動して……」

別の子どもが溶けたガラスをコテで成形しようとする。

一子「冷えたコテ使っちゃダメ！ 結晶化して透明度がなくなっちゃうよ」

一子、別の小さな子どもの手に手を添え、重ねた色ガラスの上に透明のガラスを乗せるのを援助する。
器具の片付けなどを手伝いながら、その様子を見ている松山。

× × ×
子どもたち、出来上がったとんぼ玉を嬉しそうに眺めている。

一子「みんな上手に出来たじゃない」
一子、子どもたちが宝物のように大切にとんぼ玉をティッシュにくるむのを、ホツとしたように見ている。

× × ×

客の引いた工房。

一子と松山、コーヒーを飲んでいる。

一子「良かった、みんな綺麗に出来て。せっかく作った作品が、割れちゃったり白く濁ったりするところがかりだから」

松山「それであんなに厳しかったんですね」

一子「私、厳しいと思う？」

松山「うーん。今どきの子どもにはちよっと」

一子「そうか。厳しいのか……」

松山「一子さん？」

一子「じゃ、子育てには向いてなかったね。

良かった、子どもいなくて」

松山「……」

一子「コーヒーもいいけどさ、今夜はアルコールいきますか、くまフェチも呼んで」

○翡翠館・庭（夜）

ウッドデッキのある庭。

ふる。

缶ビールを片手に宴会している一子、

相澤「新撰組だ！」

相澤、松山。

松山「おー、達筆」

相澤の傍らにはくまのタロー。

一子「松山、お前もなんか書けよ」

並んだつまみの中に大判のえびせん

松山「俺？」

べい。

一子「北海道描いてみる、北海道」

相澤、せんべいにソースをつけた筆

松山「北海道、ですか」

で絵

松山、筆にソースをつけ、うろ覚え

を描く。

の地形をせんべいに描く。

浅い皿に入れた青のりをまぶすと、

松山「こんな感じ？」

くまの顔になる。

一子が青のりをまぶすと、北海道と

相澤「かわいー。食べるのもつたない」

は似ても似つかない不恰好な凶形が

ほろ酔いかげんの一子。

現れる。

一子「オメーはなんでもかんでもくまだな」

一子、大爆笑で松山の背中をバシバ

一子、相澤から筆を奪い、ソースで

シたたき、

せんべいに『誠』と書いて青のりを

一子「いつからこんなに丸くなったんだよ、

北海道は！」

相澤「(松山に) 飲むとこんな感じなんで。

気にしないで」

○104号・中(夜)

本を読んでいる佐和。

外から聞こえるにぎやかな笑い声に

耳を傾けている。

佐和「……」

○翡翠館・庭(夜)

一子、相澤にヘッドロックをかけて

いる。

一子「うるさいぞ、くま男。正直、私が救

出しなかったら一日こいつのくま話聞か

されてたんだぞ、松山」

相澤「救出って。ひどいなあ」

松山「助かりました」

相澤「ちよつと松山さんも！」

松山「でも……若いのにコンセプトがしつ

かりしてて、偉いなと思った。ブレない

ものがあるって強いなって」

一子「それはあるかもね。こいつのくま熱

に勝てる奴はいない」

松山「一子さんだって。ちゃんと自分の居

場所守ってるじゃないですか」

一子「自分の居場所か」

一子、ふと真顔になる。

一子「私は……逃げてきたただけだよ」

松山「逃げてきた……？」

一子「四年前に産んだ子は、もうすぐ4歳

になる」

松山「！」

相澤「一子さん、子どもいたの」

一子「産んだだけ。あとは子どもの出来な

かった彼の奥さんにお任せしたの」

松山「奥さん……？」

相澤「……？」

一子「子どもが一番幸せになる方法考えた

らそうになった。そうと決めたからには二

度と会っちゃいけないって思った」

松山「……」

相澤「……」

一子「浅はかだけども、そう思ったら海を

越えなきゃって。で、たどり着いたのが

ここ。♪はくるるるる来たぜ函館」

相澤、涙ぐんでいる。

相澤「辛かったよね、一子さん」

一子「でも……ひとつだけお願い聞いても

らったから」

松山「お願い？」

一子「うん。名前、つけさせてもらったんだ」

相澤「名前？」

一子「そう。その子は生涯、私のつけた名

前で呼ばれるんだよ。……まあ、そのこ

とも本人は知らないんだけど」

相澤「うわーん」

相澤、顔を両手で覆って泣き出す。

松山「もし良かったら……聞いてもいいで

すか、その名前」

一子「聞いてくれる？」

一子、ソースをつけた筆で、せんべ

いに書く。

青のりをふりかけると、浮かび上が

る文字は『藍青』。

一子「『あお』って読むんだ」

松山「藍青ちゃん。……いい名前」

一子「ありがと」

相澤「泣きながら）藍青ちゃん」

一子「泣くな、バーカ」

静かに更けていく夜。

104号の灯りがついている。

○103号・中

松山がコーヒーを淹れている。

ドアをノックする音。

松山「はい……」

松山、ドアを開けるとタローを抱え

た相澤が立っている。

相澤「おはようございます」

松山「おはよう。どうしたの？」

相澤「そろそろ、コーヒー淹れる時間だと

思ってた」

松山「(笑って) どうぞ」

相澤「お邪魔します」

相澤を招き入れる松山。

隣の104号のドアが開き、佐和が

出てくるのが見える。

松山「あ」

佐和「！」

佐和、松山に気づき慌てて中に戻る

うとする。

松山「あの！」

佐和「……」

松山「松山です。宜しくお願ひします」

佐和「……こちらこそ」

松山「……いいお天気ですね」

佐和「……そうですね」

佐和、ペコリと会釈してドアの中に消える。

松山「……」

○104号・中

佐和、ドアの前で息を整えている。

○103号・中

松山、二つのカップにコーヒーを注ぐ。

松山「きれいな人だね、隣の……」

相澤「佐和さん？」

松山「彼女はシヨップ開かないの？」

相澤「ネット販売専門みたいだよ。一子さ

んもあの写真、ネットで買ったんだって」

松山「あの海の写真……」

相澤「あんまり綺麗で感動して佐和さんに会いに函館まで来て、そのままここに居座っちゃったって」

松山「人生を変えるほどの一枚……」

相澤「すごいですよね」

松山「どんな写真撮るんだろう……。見てみたいな」

○104号・中

佐和が『今日しゃべったことば』のノートに記入している。

『6月12日 こちらこそ そうですね』

佐和「こちらこそ……そうですね……」

○101号・中

一子が電話をかけながら、心棒を抜いたとんぼ玉の穴を丸ヤスリで磨いている。

一子「……はい、ソーダガラスの白、多め
にお願いします」

一子が電話を切ると、ドアをノックする音。

一子「開いてます」

ドアが開き、時子が顔を出す。

一子「ああ、時子さん」

○鮫処神田・外観

風情のある純和風造りの寿司店。

カウンターに座る時子と一子。

二人の前には新鮮な握りの盛り合わせ。

一子「相変わらずこのイカちゃんたちは
透明」

一子、イカの握りを手で掴み、ほおばる。

一子「んんー、とろける」

時子「ここ以外のイカ、食べたことないか
らわからないけど」

一子「贅沢ですねー」

時子「……どう？ 103号の」

一子「桧山くん？ いい奴ですよ。仕事も
手伝ってくれるし」

時子「一子さんの仕事を？」

一子「相澤くんの手伝いもしてるみたい」

○同・中

時子「まあ。ご自分のお仕事は？」

一子「そういえば、どうなんだろう……」

しばらく無言のまま寿司を食べる二人。

時子「……一子さん、最近佐和と話した？」

一子「いいえ、ここんところ顔合わせてないです。私からたずねるのも、あんまり良くないのかな、って」

時子「そうなのよねえ……」

一子「あ、でも写真は撮ってるみたいですよ」

ホームページに新作載ってましたもん」

時子「それは私も見てる」

一子「大丈夫ですよ。佐和ちゃんだってもう子どもじゃないんだし」

時子「子どもじゃないから心配なのよ。あの子……今でも怖いのかしら、男の人」

一子「佐和ちゃんには写真がある。写真がある限り外の世界と繋がってますから」

時子「……そうだといいいけど。ねえ一子さん、

昼間からお酒飲んでもいい？」

一子「もちろん」

時子「大将、日本酒冷やで。コップで頂戴」
カウンターにコップに入った日本酒が出てくる。

時子、箸でワサビをつまむとコップに入れ、ぐるぐるかき混ぜる。

淡い緑の粒子が溶けた日本酒をぐい

っと飲む時子。

一子「相変わらずかっこいいな、その飲み方。私もいつかそうやって飲みたい」

時子「今飲めばいいじゃない」

一子「いやあ、今は無理ですよ。私なんか」

時子「(笑って)……」

○102号・中

相澤がカタカタと足踏みミシンを踏んでいる。

玄関のノックの音。

相澤「はぁーい」

相澤、ミシンを止め、玄関を開ける。

寿司の包みを持った時子が立っている。

相澤「あ、時子さん」

時子「おつかれさま。これ、お土産」

相澤「わー、お寿司！ ありがとうござい
ます！ そうだ。ご注文の品、出来てま
すよ。上がってください」

相澤、時子を招き入れる。

時子「あら、早いね。お邪魔します」

相澤、和服の生地でできたティベ
アを差し出す。

相澤「はい、この通り」

時子「感激だわぁ。捨てるつもりだった着
物がこんなにかわいいくまさんになった」

相澤「僕も嬉しいです、喜んでいただけ
結構注文入ってるんです。思い出のリメ
イク」

相澤、様々な生地のパックを手に取っ
て見せる。

相澤「これは赤ちゃんの時の産着、こっち
が始めてのピアノの発表会で着たドレス」

時子、藍染めの濃淡のパッチワーク
生地でできたくまを見つめる。

時子「これは？」

相澤「それは一子さんにあげるんです。『藍

青ちゃん』っていうんです」

時子「あおちゃん……」

時子、青いくまを抱き上げる。

時子「可愛い……。お寿司、ひとつは松山

さんに差し上げてね。お留守みたいなのよ」

相澤「ああ、今仕入れに行ってるんです。

一子さんとこの配達も兼ねて」

時子「仕入れ？」

相澤「たまにお宝発掘してくるんですよ、

あの人。この前なんかビンジーの載ったアンティークの雑誌見つけてきてくれて」

時子「……ビンジー？」

相澤「ビンジー・ベア。小さな紡績工場だ

ったメリー・ソート社が1931年から

38年まで製造したシリーズです。39年に

は第二次世界大戦が始まってから、現存してるものは限りなく少ないんです」

時子「……そう」

相澤、興奮ぎみに、

相澤「それに、1949年のセバーン河の氾濫で、メリー・ソートの初期の資料は

ほとんど残ってないんですよ！」

時子「相澤くん。その話、長くなる？」

○104号・外

玄関の前に立っている時子。

ドアが開き、佐和が顔を出す。

佐和「おばさん……」

○同・中

お茶を淹れている佐和。

テーブルの上には寿司の折詰め。

壁の写真を見ている時子。

佐和「おばさんの分は？」

時子「食べてきた。一子さんと」

佐和「そう」

時子、ドーム状の小さなガラスの塊を寿司の横に置き、

時子「これ、一子さんが佐和にとって」

佐和「きれい……」

佐和、気泡の入ったガラスを手に取りる。

時子「ペーパーウェイトですって」

佐和、時子にお茶をすすめ、自分も

寿司を食べはじめる。

時子「……お隣にね、入居希望の方が入っ

たの」

佐和「知ってる」

時子「会ったの？」

佐和「挨拶しただけ。……何してる人？」

時子「古本屋さんですって」

佐和「古本……」

時子「様子を見てプランを聞いて、間違いなさそうだったら入居してもらおうと思

ってるんだけど」

佐和「……」

時子「……佐和はどう思う？　なんて……わかるわけないか」

佐和「いいと思う」

時子「え？」

佐和「なんて……わかるわけないけど」

時子「そう……よね」

佐和「いつも、コーヒーのいい香りがする」

時子、寿司を食べる佐和の様子を何気なく観察するように見る。

時子「……」

○時子の家・外観

古いが手入れのよく行き届いた日本家屋。

外塀には淡い緑の蔓植物が這うように伸びている。

○同・和室

仏壇に向かう時子。

40代後半の女性の遺影。

時子「夏ちゃん。母さんの着物、こんなに

可愛いくまさんになったのよ」

時子、遺影の傍らに和布地のテディベアを置く。

時子「佐和……ゆっくりだけど、ちゃんと前向いて生きてるから」

もの言わぬ遺影の女性。

○函館市内（夜）

夜景の美しい函館市街地。

○ラーメン店・前（夜）

カメラバッグを提げた佐和が、のれんをくぐる。

○同・中

隅のテーブル席には先客がいる。

店員「らっしゅっせー。カウンターでお願い

いしまーす」

佐和、空いているカウンター席に座る。

佐和「……塩ラーメンひとつ」

と、となりでラーメンをすすっているのは松山である。

松山「あ」

佐和「(硬直)……」

○函館市街地(夜)

満月の夜道。

自転車を引きながら歩く松山と佐和。

松山「うまいっすね、あそこのラーメン。

よく行くんですか」

佐和、うつむいたまま松山の少し後ろを歩く。

佐和「……たまたに」

松山「あ、もしかしてそれカメラ？ 今から撮影とか」

佐和「……今日はもう、終わりました」

松山「見てみたいなー、佐和さんの写真。一子さんのところで海の写真見ました。すごく雰囲気があって柔らかい感じがするっていうか……。あれ、わざとぼかして撮る技術なんですか？ あ、なんか俺、独りで喋っちゃって」

佐和「いえ、いいんです。……どうぞ」

松山「ドビュツシー、好きなんですか」

佐和「え……」

松山「いつも聴いてるから」

佐和「すみません、うるさかったですか」

松山「ぜーんぜん。むしろ心地いいです。

あれを聴きながらコーヒー飲んでます」

佐和「コーヒー、好きなんですね」

桧山「はい。あ、良かったら今度飲みにきませんか。元町でいい豆みつけたんです。一子さんも幸太郎くんも勝手に入ってきて飲んでいくんですよ」

佐和「……ありがとうございます」

桧山「じゃ、決まりだ。俺にも見せてくだ

さいね、佐和さんの写真」

佐和「……はい」

街燈に照らされ、長く伸びる二人の影。

○104号・中(夜)

ドビュッシーの『月の光』が流れている。

佐和、『今日しゃべったことば』のノ

ートを記入している。

『6月15日 塩ラーメンひとつ たまに 今日はまだ終わりました そのほかたくさん』

佐和「……」

桧山の声「じゃ、決まりだ。俺にも見せて

くださいね、佐和さんの写真」

佐和、壁にかかった写真を見回す。

人物のいない、風景ばかりの写真たち。

○函館の海(朝)

青く輝く海。

遠くに見える貨物船。

○翡翠館・外観（朝）

○同・103号・中

松山がコーヒーを淹れている。

相澤、床に寝転んで本を読んでいる。

相澤の傍らには同じ服を着たタロー。

松山「汚さないでよ、売り物なんだから」

相澤「松山さんだっていつも読んでるじゃないですか」

ないですか」

松山「まあそうだけど……」

玄関のドアが開き、一子が入ってくる。

る。

一子「おはよう。連れてきたよー」

一子の後ろに隠れるように佐和が立

っている。

松山「おはようございます。どうぞどうぞ、

せまいところですが」

佐和、一子に続いて緊張したように

部屋に上がる。

相澤「広さはみんな一緒でしょ。同じ間取

りなんだから」

一子「むしろ何にも無い分このの方が広い

よね。つか、こんなにガランとして古本

屋なんて開けるの？」

松山「ネット販売専門なんで」

一子「ネット販売？」

相澤「あ、佐和さんと一緒だ」

一子「佐和ちゃんの写真は芸術なもの」

松山「……」

相澤「じゃ、佐和さんも一緒に週末ギャラ

リーやりませんか？ うちに来るお客さん

にも声かけて」

一子、座っている相澤の髪の毛を掴んで引っぱり、

一子「はい、お喋りしてないでコーヒー運ぶの手伝って！」

相澤「痛いですよ一子さん……」

しぶしぶキッチンへ行く相澤。

手持ちぶさたに立ち尽くしている佐和。

一子「ほら佐和ちゃん、ここ座って」

佐和「……はい」

相澤「松山さん、テーブルとかお盆とか、

何にもないんですか」

松山「ああ、ちよつと待ってて」

松山、部屋の隅に置いてあった未開封のダンボールを運んできて、部屋の

の真ん中に置く。

松山「これ使って」

相澤「いいんですか、ここに置いちゃって」

相澤、運んできたマグカップをダンボールの上に置く。

コーヒーから立ち上る香り。

一子「うーん、相変わらずいい香り。佐和ちゃん、お砂糖は？」

佐和「……ブラックで」

松山、マグカップをひとつ、佐和に手渡す。

松山「どうぞ」

佐和「……ありがとうございます」

佐和、コーヒーの香りを吸い込むと、ゆっくりとカップに口をつける。

佐和「……」

佐和がコーヒーを飲むのを、固唾を

飲んで見守ってしまう。 松山、一子、

相澤。

ひと口飲んだ佐和。

佐和「……おいしい」

松山「良かったあ」

松山、一子、相澤も胸をなでおろす

ようにほっとして。

× × ×

笑いながら会話し、コーヒーを楽しむ面々。

佐和も笑顔で相槌をうち、皆の話を聞きながら楽しんでいる。

× × ×

ダンボールの上のマグカップが空になっっている。

相澤「さあ、今日も頑張ってくまちゃん作

るぞー。松山さん、ごちそうさま」

相澤、タローを連れて部屋を出て行く。

一子、立ち上がり、

一子「私も今日は80個納品なんだ。ゴメン、

片付け手伝えないけどいい？」

松山「そのままでもいいですよ」

一子「じゃ、ごちそうさん」

一子、チラリと佐和を見るが、振り切るように103号を出て行く。

佐和「……」

松山がダンボールの上のマグカップを片付けると、ダンボールにコーヒー色の丸い輪っかが四つ。

佐和「……なんか、可愛い」

松山「え……？」

佐和「これ、写真に撮っていいですか？」

桧山「……？」

○103号・前

玄関の前で中の様子を気にしていた

一子、

一子「大丈夫みたい……」

101号へと戻っていく。

○104号・中

佐和、カメラの棚から、紅茶の空き

缶で作ったピンホールカメラをひと

つ選び、手に取る。

○102号・中

鼻唄を歌いながら、カタカタとミシ

ンを踏む相澤。

○101号・中

徐冷用の灰の中から取り出したとん

ぼ玉を並べていく一子。

開け放った窓から吹き込む風が手作

りのガラスの風鈴を鳴らす。

○103号・中

被写体までの距離を測り、三脚にカ

メラを固定する佐和。

その様子を驚きをもって見ている桧

山。

桧山「カメラって、それですか？」

佐和「はい」

佐和、ピンホールを覆っていた布テ

ープをはがす。

桧山「今、何したの？」

佐和「(笑つて) シャッターです」

桧山「???」

佐和「一枚撮るのに10分くらいかかります。

ヘンですよ、デジタルの時代にこんな
の」

桧山「いえ、面白いです。……そうだ佐和

さん、写真見せてくれる約束」

佐和「……そうでしたね」

○104号・中

整然と貼られた写真。

部屋を横切るロープにも、乾燥させ

るための写真が留めてある。

部屋を見回す桧山。

桧山「あ、これ……。レコード？」

佐和「はい」

佐和、プレーヤーのスイッチを入れ、

回りだすレコードに針を落とす。

静かに流れ出す『月の光』。

桧山「いつもこれで聴いてたんだ」

佐和「亡くなった母が好きだったので」

桧山「……」

せまるように桧山の目に飛び込んで
くる写真の数々。

函館の海。

港に停泊する船。

外国人墓地。

そびえるように建つ、下から見上げ

た構図の教会。

揺れるようにぼやけた三日月。

函館の街の路地裏。

日向ぼっこする猫。

松山「……」

その光景に圧倒される松山。

松山「これ全部佐和さんが」

佐和「誰でも撮れるんです。根気があれば」

松山「なんでこんなにノスタルジックなん

だろう」

佐和「レンズは光を強制的に曲げて焦点に

集めるから鮮明な画像になるんです。ピ

ンホールはレンズほど鮮明じゃないけど、

独特のやわらかい画像になる」

松山「……」

松山、壁の写真をあらためて見る。

松山「人が……写ってないね」

佐和「だからピンホールカメラをはじめた

んです」

松山「……？」

佐和「動くものは写らないんです」

松山「人は写らないってこと？」

佐和「長い時間じっとしてれば写るけど」

松山「長い時間？」

佐和「時間は……距離とか光の量によって

も変わります」

松山「普通のカメラみたいに、一瞬を切り

取ってるわけじゃないんだ」

佐和「はい。街と、時間を共有するんです」

松山「時間の流れ方が違う……」

佐和「え……？」

松山「ここに来るはずだった先輩が言って

たんです。本当だ。この写真の中には、

ゆつくりと流れる時間が閉じ込められて

る」

佐和「……」

桧山「俺、何やってんだろ……」

佐和「……」

桧山「全然ダメじゃん……」

佐和「……桧山さん？」

桧山「……ありがとう、佐和さん。写真見

せてくれて」

佐和「いいえ。あの……」

桧山「じゃ……」

桧山、佐和に背を向け、104号を

出て行く。

佐和「……」

閉まるドアを、途方に暮れるように

見つめる佐和。

回転するレコードの針が飛び、同じ

メロディが繰り返される。

○住宅街の路上

自転車で走り出す桧山。

○市街地

車道を車と同じくらしいの速さで疾走する桧山の自転車。

○坂道

叫びながら自転車で坂を駆け下りる

桧山。

桧山「わーーーーーっ」

○港の見える公園

桧山、自転車を止め、球形の回転ジ

ヤングルジムのてっぺんに座って海
を見ている。

松山「……」

遊具の周りで遠巻きに松山を見てい
る小学生。

小さな子どもたちの飛ばすしゃぼん
玉が海から吹く風に流れていく。

松山「……」

ぼんやりと海を見つめる松山、ポケ
ットから携帯電話を取り出して操作
する。

携帯のアナウンス「ただ今電話に出ること
ができません……」

松山「……」

携帯のアナウンス「……ピーという発信音
のあと、ご用件を3分以内でお話しくだ

さい……（ピー、と電子音）」

松山「先輩……。俺やつぱ、無理みたいです」

○時子の家・外観

塀に沿って蔓を伸ばすクレマチスの
花。

○同・居間

和風の内装に洋式の丸テーブル。
調度品も西洋アンティークである。
座る松山に、時子が紅茶を運んでく
る。

時子「そろそろいらつしやると思ってたわ」

松山「先日はお寿司をごちそうさまでした。

おいしかったです、すぐく」

時子「良かった。翡翠館の方とも仲良くや

つてらっしやるみたいだし。どう？ 準

備は進んでる？」

松山「実はそのことなんです……」

時子「……？」

松山「住む場所までお借りして本当に恐縮

なんです……。今回のお話は、やはり

ご辞退しようかと。なるべく早めに荷物

をまとめて……」

時子「戻る場所あるの？」

松山「……なんとか、します」

時子「お気に召さなかったのかしら、翡翠

館は」

松山「まさか。大好きな場所です。ずっと

ここに居られたら、つて思います」

時子「……」

松山「居心地が良すぎて……。ここにいと、

自分がみじめになります」

時子「……」

松山「輝く宝石の中に、俺みたいな石ころ

があっっちゃだめなんです」

時子「あなたが、石ころ？」

松山「すみません……。古本屋なんて言って、

本当はただのせどりなんです」

時子「セドリ？」

松山「安く買ってきた古本をネットで転売

して稼ぐんです。何の生産性もない……」

時子「……」

松山「はじめは自分の読みたい本買って、

飽きたら売ってを繰り返してたんです。

そしたら百円で買った本が1万5千円で

売れたことがあって、なんだこれ、楽勝

で商売になんじゃん、つて」

時子「……」

松山「そんな人間なんです。翡翠館に居る人たちはみんな、ちゃんと自分の夢持つててそのための努力もしてて、俺なんかとは全然違つてて……」

時子「……」

松山「一子さんのガラスも、幸太郎くんのティディベアも、佐和さんの写真も、全部芸術で、輝く宝石でした。なのに俺は……」

時子「あの子の……佐和の写真を見たの？」

松山「はい」

時子「どこで？」

松山「佐和さんの部屋で」

時子「あの子の部屋で？」

松山「はい。あの……」

時子「……佐和はね、私の姪なの」

松山「姪ごさん？」

時子「亡くなった妹の子。いろいろあつて、ちよつと対人関係が苦手で……。あの子、ちゃんと喋つてた？」

松山「はい。今朝みんなでうちでコーヒーを飲んで、そのあと佐和さんの写真を見せてもらつて……。カメラや写真のことも教えてもらいました」

時子、涙ぐむ。

時子「そう……。良かった」

松山「あの、時子さん？」

時子「……松山さん、翡翠館はね、創造する場所なの」

松山「わかってます。だから俺にはその資格は……」

時子「わかってないわね。翡翠館は自分を創造してもらおう場所なの」

松山「自分を、創造する……」

時子「みんな『不完全な月』なのよ」

松山「(驚き) ……!」

時子「本当はあなたもはじめからここに入居する資格があったのよ」

松山「どうして、そのこと……」

時子、カップボードの引き出しの中から、一冊の本を取り出す。

ハードカバーの表紙には『不完全な月』のタイトルと濃紺の空に浮かぶ三日月の写真。『松山英二』の作者名。

松山「……!」

時子「藪下さんが送ってくださったの」

松山「先輩が……」

時子「あなたはきつとまた書ける。だから翡翠館に入居させてほしい、って」

松山「……」

時子「ここに出てくる人たちは、みんな翡翠館の住人でしょう」

松山「違います。それは俺が21の時に書いたもので……」

時子「でもそうなのよ。みんな不完全な月」

松山「……」

時子「松山さん。ここでこの物語の続きを書いてくれない?」

松山「……無理ですよ。10年前に小さな文学賞取っていい気になって、これで食えると思ったけど。そんなに甘くなかったんです。だから今こんな感じで……」

……」

時子「いいじゃない、今のあなたも」

松山「今の俺……？」

時子「みんな今を必死に生きてるの。翡翠

館の人たちが一生懸命生きていく姿、あ

なたの目で見つめてほしいのよ」

松山「……」

時子「それに。私も飲みたいわ、あなたの

コーヒー」

○104号・暗室

暗室の赤い光の中で写真を現像する

佐和。

印画紙にゆっくりと浮かび上がる、

四つの輪っかがついたダンボールの

像。

佐和「(笑顔になり)……」

○103号・中(夕)

松山、うすぐらい部屋で未開封だっ

たダンボールを開く。

中にはびっしりと、手書きやワープ

口の原稿が入っている。

松山「……」

松山、原稿の一枚一枚に目を通す。

おびただしい数の原稿を、めくって

は読んでいく。

しだいに松山の目に涙が浮かんでく

る。

嗚咽とともに原稿を読む松山。

松山の携帯が鳴り、画面を見る。

液晶には『藪下恭介』の文字。

松山「(出て)先輩？」

藪下の声「英二。……留守電聞いた」

桧山「(鼻をすすり)先輩……」

藪下の声「なんだお前、泣いてんのか」

桧山「先輩、時子さんに俺の本……」

藪下の声「そこにあるおびただしい量の本
がお前の糧になってないわけがないだろ」

桧山「……」

藪下の声「その部屋に誰か他の奴が入るっ
て想像できるか？」

桧山「先輩。俺、ガイドブックに載ってな

い函館、見つけました」

藪下の声「そうか」

桧山「俺……書けるかもしれない」

藪下の声「あたりまえだろ、バーカ」

桧山「先輩……」

104号から、小さく『月の光』が
聴こえてくる。

○青い空(朝)

抜けるような青空に白いシートがバ
サツと音を立ててはためいてー。

○翡翠館・庭(朝)

パンパン、としわを伸ばし、シート
を干す相澤。

相澤「今日もいい天気だー！」

張られたロープには既に大小いくつ
もの洗濯物がゆれている。

相澤とおそろいのタローの服も洗濯
ばさみで留めてある。

○101号・中

バーナーの火が、赤い色ガラスを熔
かしている。

保護用のメガネをかけた一子、心棒

○翡翠館・前

にガラスを巻き取り、ステンレスの

2トトラックが停車している。

作業板の上で金箔をまぶしつける。

二人の男性作業員が荷物を降ろして

作業台の後ろの棚には、青いパッチ

いる。

ワークのくま。

○103号・中

一子、再びバーナーであぶりながら、
練り飴のようにガラスをねじってい
く。

壁の造りつけ書架には、天井までび
っしりと埋まった古本。

金が散りばめられたとんぼ玉の土台
にパーツを乗せ、コテで成形してい
くと、その断面、見事な花となって
咲く。

作業員が運んできたのは小さなテー
ブルと椅子のセット3セット分と、
布張りのソファ。
作業員に指示を出す松山。

メガネをはずした一子、ふっと優し
い表情になる。

松山「そのソファはこっちの壁際に、この
向きで……」

一子「出来た……。秋の色」

テーブルの配置など手伝っている相
澤。

相澤「結局ここ、喫茶店になるんですか」

松山「違うよ。コーヒーも飲める古本屋」

キツチンの奥の小さな作業スペースに、パソコンが置いてある。

松山「兼、俺の作業場」

そこへ、荷物を抱えた一子が入ってくる。

一子「ご注文の品、お待たせしました」

一子、テーブルの上に荷物の包みを置く。

包んだ新聞紙を開くと、ガラスでできた電気のシェード。

相澤「わあ、おしゃれー！」

× × ×

家具が配置され、各テーブルの上には色違いの電気シェードが吊るされ

ている。

お盆に乗せたコーヒーを運んでくる松山。

松山「お待たせしました。来週からはコーヒーチケット買ってね」

相澤「(耳を両手でたたき) 聞こえない」

相澤はテーブル席に、一子はソファにゆったりと座り、コーヒーを飲む。

一子「やっぱり『家具の人』はすごいな。空間がガラッと変わっちゃった」

松山「一子さんの電気もすごくいいです」
相澤「うん。雰囲気合ってる」

一子「佐和ちゃんの写真もいいね」

テーブル席の壁面に飾られた小さなハガキ大の額。

セピア色の函館の風景。

相澤「ねえ、松山さん。僕のくまちゃんたち

はどこに置きますか」

松山「いや……くまちゃんは、ここには」

相澤「なんですか！ 一子さんのガラスに佐和さんの写真。そしたらうちのくまちゃんも置かなきゃダメでしょう！」

松山、相澤の傍らのタローを奪い、

松山「じゃ、タローを」

相澤「タローはダメです！」

ドアがノックされ、カメラを持った佐和とアレンジフラワーを手にした

時子が入ってくる。

時子「あら、素敵」

佐和「おめでとうございます」

一子「わー、時子さん、佐和ちゃん。座つて座つて」

松山「今コーヒーを」

佐和「その前に写真撮りましょう。開店記

念の」

時子「そうね」

時子、ソファの前のテーブルに花を置く。

『祝開店 函館珈琲』の文字。

一子「じゃ、松山くん真ん中ね」

松山「いや、時子さん真ん中に」

時子「何言ってるの、あなたのお店でしょ」

相澤「みんな遠慮してるなら僕が……」

三脚にカメラを固定している佐和、

佐和「じつとしてくださーい」

松山「……すみません」

松山を真ん中に、ソファの周りに集う面々。

佐和「じゃ、いきまーす」

佐和、ピンホールに貼られた布テープをはがすと、ソファの位置に走り、
松山の隣におさまる。

全員、笑顔でカメラを見つめる。

松山「……」

時子「……」

一子「……」

相澤「……」

静まりかえる空間。

相澤「……あのー」

佐和、前を向いたまま

佐和「動いちゃダメ。じっとして。写らな

いから」

相澤「じっとして……。どのくらい？」

佐和「15分くらい」

相澤「ええーっ」

一同、がく然とするがひきつった笑顔は崩さず、カメラを凝視している。

○翡翠館・全景

街並みに映えるペパーミントグリーン。
ン。

相澤の声「あのー、まだ……」

佐和の声「じっとして」

徐々に引いていくカメラ。

秋の装いを増した函館の街に抱かれるように佇む翡翠館。

了

本電子書籍は、2013年12月6日発行の『第19回函館港イルミネーション映画祭2013 第17回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第19回函館港イルミネーション映画祭2013
第17回シナリオ大賞 函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品

函館珈琲

作：いとう菜のは

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2014年4月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
